

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (135)

2022年12月の作品は
琉球を研究する著作：『南嶋志』と『琉球談』

展示テーマ

～琉球と日中の関係～

今回の展示では、寛政2年(1790)の『琉球談』と享保4年(1719)の『南嶋志』という二つの書を紹介する。

琉球王国は長い歴史があり、中国大陸と日本の間に位置していた。古くから両国との関係も良好であった。この二つの作品には漢文も含まれるので、中国からの留学生である私にとって理解しやすいと思い、『南嶋志』と『琉球談』を研究対象にした。

当時の琉球のアイデンティティ、また新しい琉球史研究の中心となる問題として、「琉球」と「沖縄」の呼称の違いは、最も基本的なものの一つである。『南嶋志』は江戸時代の作品で、日本と琉球の文化交流史が含まれている。

中国(明・清)の冊封体制のもとにある琉球は、どのように位置づけられるか。国王の冠をはじめとする衣装における様々な文化事情や、中華思想のもとで、琉球官員の官職品級の構成はどうであったのか、これらは『琉球談』に答えがある。

『南嶋志』と『琉球談』の本文を味わい、琉球と日中の関係を分析したい。

国際総合科学部 国際文化コース



『南嶋志』(1冊、42丁)
江戸時代、享保4年(1719)以降
作者：新井白石(1657-1725)
出版：宝玲文庫
縦26.5cm × 横18cm

作者は『隋書』と『使琉球録』における間違い内容を直し、同時に明治時代の日本人へ琉球に関する知識を普及するため、この本を書いた。原本には、巻上に地理・世系、巻下に官職・宮室・冠服・礼刑・文芸・風俗・食貨・物産が収録されている。

『琉球談』
(1冊、46丁)
江戸時代、寛政2年(1790)
作者：森島中良(1756-1810)
出版：須原屋市兵衛
縦22cm × 横15.7cm

蘭学者の森島が寛政2(1790)年に上梓した書物で、内容は「為朝渡琉伝説」に注目し、日本と琉球の関わりや風俗について記している。その本の特徴は多くの図によって、尚氏時代の服装を再現し、衣装をはじめ文化事情が一目瞭然である。



展示のみどころ

～『南嶋志』と琉球のアイデンティティ～

『南嶋志』で著者は「沖繩」という概念について説明している。「地理編」冒頭には、「沖繩島、即中山國也」と記されている。実際『南嶋志』で「沖繩」という言葉が使われたのは、この箇所が唯一で、後ろの章では「沖繩」を使用せず、全て「琉球」が使われる。同じく地理編の冒頭に、「琉球在西南海中、依洲島為國、有國以來、不知其代數云」という文が見える。日本の南の別の島国について、作者が研究中で使用した最も主要なキーワードは、明らかに「琉球」である。

そして、序章冒頭の句は、「琉球國、古未有聞焉、始見於隋書」となっている。「琉球」という呼称が、隋帝国における公式の文献に初めて用いられたと説明されており、それ以前には何の記述もなく、当然「沖繩」という名も登場しない——いわゆる「古未有」であった。よって、この記述から当時の琉球国が日本に属していないことを示し、当時の日本人は琉球のことをあまり知らなかったことが判明する。

～『琉球談』における東アジア文化～

琉球官服と冊封体制

琉球人の衣装は江戸時代の日本人の着物と大きく異なる。それに、国王の冠や御袍は明皇帝に似ている。『琉球談』の官服に関する絵を見ると、確かに、明帝国及び李氏朝鮮のものに似ている。横に「国王は図の如く、烏紗帽小朱纓、龍頭の簪、雲龍の紋（中略）、今清朝の冊封、冠服を改め」との解説文がある。

しかし琉球国王の胸にある龍紋は、五本爪の龍ではなく、四本爪の龍である。五本爪の龍は、元代から清代まで、中国皇帝による中央集権のシンボルとして、天子一人だけが使えるものであった。他の皇族及びの従属国の君主は、爪が一つ足りない「四本爪の龍」しか使えなかった。李氏朝鮮、阮（げん）氏ベトナムも同様であり、琉球国王の冊封は中原と琉球の関係において重要な要素であった。琉球国王が



崩御し新たな国王が即位する前に、清国に報告しなければならず、清は使節団を派遣し琉球を訪れ一連の冊封式を行った。

琉球衣装の変容

周知のように、清統治者は漢人に辮髪と清の衣装を強要した。だが同時期の琉球では、清に倣って「易服」運動（1650年運動）が広がった。これは、明朝の衣装を捨て、琉球人のもともとの衣装に着替えさせることである。運動の一段階目は琉球出身の官員を中心に、二段階目は明朝移民出身の官員を対象とした。この運動は琉球が清に忠誠を表した証拠だとされ、『琉球国史』には「以示心服清朝之意矣」（清朝の意に心から従う）と記された。

琉球の官職と品級の区分

官職の項目に、「位は一品より、九品まであり」と書いてある。品級は大陸と同じ「九品十八階」を原則とし、延べ18の品級がある。皇帝、皇后などを除き「正一品」は最上位、「従九品」は最下位となる。北宋時代から用いられており、従属国であった李朝、阮朝、琉球第二尚氏王朝の官級制度となった。日本はすでに冊封体制から脱し「九品十八階」は使われなかった。

琉球の「九品十八階」の構成は、王、摂政、三司官、表十五人（各行政部長官）、各行政部からなる。「三司官」は漢名で「法司」ともいう。国政を取り仕切る宰相で3人制。尚巴志王代に設置されたとも伝えられる。通常は三司官の責任で政務を進め、重要事項は協議して摂政し、国王の裁可を得た。

参考文献

- 『新琉球史論考』一兼及若干历史地图之考察 徐勇（北京大学）2020年9月3日
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/515097>
- <https://ryukyushimpo.jp/okinawa-dic/preentry-41529.html> 琉球新報（2003年3月1日）
- https://www.sohu.com/a/244043719_135586 作者：讲史论道（2018年7月29日）

あとがき ～貴重資料に触れて～

今学期の学習を通して、私は日本の貴重書の適切な保存方法に深く敬服しています。調査中も慎重にやっており、この目新しい調査の仕方に慣れていきました。卒業を前にこのような機会をお与えくださったことに感謝し、更に日琉文化について、一層深く理解することができました。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、

展示品を除き申請が必要です。また、

利用は学術研究目的に限らせていただきます。

※過去の展示はオンラインでも公開中です！

第136回展示は令和5年1月上旬からを予定しています。



令和4年12月1日発行

令和4年度 日本文化史B受講生 編集

236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2

横浜市立大学 学術情報センター